

平成23年度 第4回CCC政治学グループ運営委員会 議事概要

- I. 日時 : 平成24年3月5日(月) 17:00~19:00
- II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室
- III. 出席者 : 萩原委員(skype)、川島委員、名取委員、吉岡アドバイザー
(事務局)井端事務局長 森下主幹 松本職員

IV. 議事概要

1. 学士力の実現に求められる教育改善モデルのとりまとめについて

(1) 中間まとめに対するサイバーFD 研究委員からの意見を検討し、反映、改定を行った。

- ① サイバーFD 研究委員意見 No.6 「あまりにもレベルが高すぎる。これは、「最低限」ではなく、むしろ「夢」を語っているものであって、教育現場のコントロールとしては不適當ではないかと感じます。」について。

- ・このモデルは5年先を想定したガバナンスに向けた一つの提案としているため、ハードルは高いかもしれないが、このレベルまで持っていきたい。
- ・具体的な適用は個々の教員のやり方があるが、今までの授業のあり方にICTを組み入れることで少しでも関与してもらいたい。
- ・到達目標1~5について段階的に作成したモデルだが、全ての目標に対してだと誤解されているのかもしれない。

などと委員から意見が出され、冊子を編集する際、誤解されないよう説明を追記することとした。

- ② サイバーFD 研究委員意見 No.7 「2.5ICTを活用して期待される効果 ①グループ学習と学習管理システムや掲示板等により、受け身の学びから協働して自ら学ぶ姿勢を身に付けさせることができる。③課題の探求を通して、自らがその一員である政治社会のしくみと、そこにおける自分の役割の重要性を気付かせることができる。については、必ずしも保証してくれると限らない。」について

- ・単なるグループ学習でなく、文脈を持たせ、学びの仕組みを入れ込むべきではないか。
- ・どのようにグループ学習を活性化させるか。私情協の別カテゴリでグループ学習の活性化を伝えていくのはどうか。
- ・SA、TAなどの助手がいればネット上の議論が活性化するのではないか。

などと委員から意見が出され、冊子を編集する際、文章を追記することとした。

- ③ サイバーFD 研究委員意見 No8 「2.3 授業にICTを活用したシナリオ 「受動的段階(知識の正確な習得)」「知識の正確な習得(受動的段階)のため講義が中心となる」との表現がありますが、賛成できません。講義形式だと知識が正確に習得できるという証拠はどこにあるのでしょうか。教員であれば、講義で話したことを大半の学生

が正確に理解できていないことを経験的に知っていると思います。また、教育心理学方面の研究では講義形式がもっとも学習効果が低いことがわかっているはずです。

「知識を正確に習得させるには講義」という発想は教員の自己満足に過ぎません。」について。

- ・基礎は教えなければならないので講義が中心にはなるが、講義でなければならないわけではない。
- ・事前・事後学習も含めて描いたつもりだった。
などと委員から意見が出され、以下のとおり改定した。

2.2 授業の仕組み

ここでは卒業するまでの学習期間を通じた授業改善モデルであり、ある特定年次をイメージしたものではない。各々の授業は知識の正確な習得の段階、習得した知識を自分流にアレンジして応用する段階、以上の段階を踏まえて新たな問題発見につなげていくフィードバックの段階の三つのステップを踏む。

2.3 授業に ICT を活用したシナリオ

- ① 知識の正確な習得のため講義形式が中心となるが、事前・事後の学習が可能となるようにシラバス、授業ノート、参考文献リスト、テキスト等を Web 上で共有できるようにしておく。

(2) 教育改善モデルにおける授業の点検・評価・改善について

各委員会で教育改善モデルを提案したが、理事会でPDCAのサイクルを回すための仕組みが必要だとの指摘があった。それに応え、教育改善モデルを教員が連携して点検・評価・改善してゆくための基準を4～5行で表現することにした。

この教育改善モデルは3つの段階を踏ませ、1～4年間でスパイラルに発展的な学びを提案しているが、それをどのように振り返るのか。振り返った後でどのように改善につなげるのか。その仕組みについて検討を行った。

- ・内部評価と外部評価で考えるべきでないか。内部評価とは学生の授業評価のことで、外部評価とは①国内の学外の同じ分野の専門家、②国外の研究者、計3点が必要なのではないか。
- ・学内で学んだことについてどのように振り返りをするか。
- ・インターカレッジのような場で成果を発表し、大学間で新しい問題発見など気づきをさせることが外部での評価の場ではないか。
- ・3つの段階とは教員の学識と同じではないか。発見する力があり、それを統合し、応用する力。最後にプレゼンして反応をキャッチアップする。そういう意味ではカリキュラムのあり方まで見直しをすることになるのではないか。
- ・内部の授業技術、授業マネジメント技術の振り返りにとどまらず、外部評価までいくならカリキュラムの見直しをしていくイメージで考えてはどうか。
- ・学生による評価、学生の到達度、客観的に教員レベルで共有できる仕組み。対外

的に評価できる仕組み。さらに国際的に評価できる仕組みが必要でないか。

- ・教員の役割分担を明確にし、シラバスの上でチームを組んで連携し、振り返りをしていくべきでないか。
- ・自分の授業を履修している学生の到達度はわかるが、他科目や学部全体で見ると3つの段階のうち、どこが不足しているか、どこかの能力が高いのかわからないので共有する仕組みとして、ガバナンスの体制ができていれば評価しやすい。
- ・共有する仕組みができればシラバスをプロジェクト的に展開できるのではないか。
- ・シラバスで示したものが点検・評価・改善の柱になるので、関連科目でシラバスを共有し、シラバスに基づいた項目の統一化をはかり、ネット上で共有化してはどうか。
- ・最終的にはシラバスを見直すか、その前に学士力の目標に対して適切に機能しているか、授業の目標がどこにあるかをそれぞれの教員が自分で振り返る必要があるのではないか。
- ・逐次振り返り、教員同士で情報をネット上で共有し、できるだけ授業期間中に改善できるものはしていくべきでないか。
- ・評価シートはエビデンスとして必要だが、自主的にやるためには教員はどのような努力をすべきかを描いたらどうか。
- ・シラバスに基づく個々の授業の振り返りと学生による評価がリンクできればよいのではないか。
- ・将来的には英語のシラバスを公開していくべき。
- ・教員が自己点検・評価したものをネット上に開示し、教員同士で意見交流することが仕組みとして必要。場合によってはシラバスの見直しにつながるのではないか。などと委員から意見が出され、下記のとおり追記した。

3. 授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、到達目標や到達度について学生の授業評価、担当教員の自己点検を踏まえ、ICTを活用して教員間で随時確認し、調整する。さらに、学内外、国内外を問わず、到達目標の達成度やカリキュラム全体について中立的なレビューを行う。

2. 今後のスケジュールについて

(1) 今後の検討課題

- ・教育改善モデルを実現するための教員の指導の能力について
- ・教育改善モデルの編集作業

(2) 次回の委員会

日時：平成24年4月以降　メーリングリストにて調整

場所：私立大学情報教育協会　事務局　会議室